「知事とのフレッシュトーク」（平成２３年１２月６日実施）の概要について

「知事とのフレッシュトーク」は、知事が高校生の皆さんと県の未来について意見交換を行うものです。

平成２３年１２月６日（火）に八戸市の県立八戸水産高等学校において実施した、「知事とのフレッシュトーク」の概要をお知らせします。

八戸水産高等学校の概要

明治４２年に青森県唯一の水産・海洋系高等学校として創立。平成２０年に創立１００周年を迎えた。八戸港にほど近く、水産教育に適した環境が整った場所に立地している。

海洋生産科、水産食品科、水産工学科、情報通信科の４つの特色ある本科と、さらに専門性を高める２年課程の専攻科（漁業科、機関科）を設置し、海のスペシャリストを養成している。これまで送り出した多くの卒業生は、水産業界、海運業界等で活躍し、その範囲は国内のみならず、海外にも及んでいる。

本科（海洋生産科、水産食品科、水産工学科、情報通信科）４０３名、専攻科２０名の４２３名の生徒が学んでいる。

◆知事入場◆

◆開催◆

校長歓迎のことば

本日、知事には遠いところを、また、１２月の忙しい最中、本校にお出でいただき、ありがとうございます。実は、３年前の平成２０年１２月９日に、本校の創立百周年記念式

典を八戸市公会堂で開催しましたが、その際も知事に出席していただき、祝辞を頂戴しました。ということで、知事は八戸水産高校を大好きなんだと私は思っています。

本日は、本校の姿、成立ちなどを生徒から情報提供するほか、庁内ベンチャーでヒラメを取り扱う事業に取り組んでいますので、１年目の途中経過について報告もさせていただきます。そして、生徒の代表から、知事にお聞きしたいこと、あるいは提案したいことを発言させていただきますので、よろしくお願いします。

周りの生徒諸君も、一人ひとりが自分だったらこう思うということを考え、今後の学校生活、あるいは将来の社会生活に活かしていただければ、大変ありがたいと思います。

◆生徒による学校紹介◆

説明者（情報通信科３年　男子　生徒会長）

本校は平成２０年に創立百周年を迎えた歴史と伝統ある水産高校です。青森県唯一の水産・海洋系の高等学校で、４つの本科と２つの専攻科があり、海のスペシャリストを養成する県立の高等学校です。特色ある教育活動や生徒会活動を通して、明るくたくましい水産人になれるよう日々頑張っていて、現在本科生４０３名と専攻科生２０名の４２３名が在席しています。

１年生全員が大型実習船「青森丸」での実習を行います。青森丸には水産に関する様々な施設設備があり、恵まれた環境にあることに感謝しながら学習しています。釣り実習や水産基礎実習のほか、自分達で食べる食事の当番もあります。２年生では遠洋航海実習があり、２か月半の期間を実習船で過ごします。実習ではマグロ延縄（はえなわ）実習でマグロを釣るほか、アメリカ合衆国ハワイ州へ寄港し、外地での見学実習をします。

海洋生産科では、海、船、魚について学び、船舶運航について学びます。

水産食品科では、食料資源である魚介類の食品製造、管理、流通について学びます。

水産工学科では、船舶や工場の心臓部である機関について学びます。

情報通信科では、海のマルチメディアに対応できる海洋エレクトロニクスについて学びます。

年間行事としては、月毎に水産高校ならではの行事があります。また、９月と１月に青森丸の長期航海実習があります。１０月の水産デーでは、マグロ解体ショーや水産食品科の模擬店販売等、水産高校ならではの催し物があり、毎年５千名程の来場者がある活気ある文化祭となっています。７月に行われる八水クリーン作戦では、全校

生徒が地域のゴミ拾いをし、町の清掃活動をしていて、生徒会活動の大きな目標の一つである、「よりよい環境づくり」に継続的に努めています。２年生の夏季休業中にはインターンシップがあり、それぞれが各企業に行き、体験を通して学習します。

部活動は、体育系と文科系とも部長を中心に活発に行われています。また、八水大漁太鼓は様々なイベントに呼ばれていて、勇壮な太鼓演舞は地域の皆様に愛されています。

◆水産食品科が製造した缶詰の試食◆

ホタテ水煮、ホタテ・ウニあえ、蒸しウニの缶詰を試食。

三村青森県知事

ごちそうさまでした。これらの缶詰は、使いやすく手間も省け、いろいろな料理にも使えるし、栄養満点です。ホタテの水煮などはサラダにしてドレッシングをかけて食べるといいかもしれません。味付けも薄味で、健康的でいいと思います。

◆庁内ベンチャー事業中間報告◆

説明者（海洋生産科２年　男子）

八戸水産高校では、今年度から庁内ベンチャー事業として、「青森県産天然活ひらめの付加価値向上作戦」を実施しています。事業の目的は青森県の漁業収入をより向上させ、漁業をもっと魅力あるものにしていくことです。そこで、青森県の魚として指定されているひらめに着目し、主に４つの事業展開を行っています。

１つ目は、「ひらめの実態調査活動」です。この活動では、ひらめがどのような場所にどのような価格で流通しているのか、料亭では海産物等にどのような価値を求めているのかなどを研究しています。まず、県の水産事務所を訪問し、青森県産ひらめの漁獲動向等を知りました。次に、ねぶた期間中に青森市のアウガに行き、観光客にアンケート調査を行

いました。１００名強の方に協力していただき、県産ひらめのイメージや家庭での料理方法等を聞きました。集計結果の一例として、県の魚としてひらめがあまり知られていないことや、青森県民はひらめが好きであること、調理方法としては刺身以外の食べ方が少ないと答えた方が約半数いました。また、刺身以外の食べ方としては、煮付けが最も多いことがわかりました。これらの結果から、今後新たな調理方法への対応が必要であると感じました。さらに、八戸第二魚市場を訪問し、水揚時のひらめの取扱方法等を見学しました。活魚と鮮魚の価格差や、等級の違い等を確認することができました。今後、ひらめの実態調査では、地元や県外の販売店、築地市場において調査活動を行っていきたいと考えています。

次の活動内容は、「ひらめのＰＲ活動」です。実態調査で得たデータを元に、戦略的なＰＲ活動の実施を考えています。この活動ではまずキャラクターをデザインし、ＰＲ用ののぼりやポケットティッシュを作成しました。今後、これらをＰＲ活動に役立てていきたいと思っています。＜ＰＲ用のポケットティッシュを知事に贈呈＞

３つ目の活動内容は、「ひらめの無水輸送技術の開発」です。輸送コストを削減させることを目的に、ひらめを生きたまま水無しで遠くまで運べる、夢のような技術の実用化を目指します。しかし、３月の東日本大震災で、栽培漁業実習場が津波の被害を受けたため、まだ実験はスタートできていません。県の支援もあり、復旧間近ですので、年明けには実験に取りかかれる予定です。

活動の最後は、「ひらめを使った新しいメニューの開発」です。他の高校と共同でメニューの開発を行うもので、現在は百石高校の食物調理科の方々と活動しています。本校で冷凍した切り身から生ハム風ひらめを試作し、百石高校ではそれを用いたひらめ料理を制作し、試食会を行いました。今後、生ハム風ひらめの試作を継続し、冷凍及び解凍の最適条件の検討を行う予定です。

今後もこれら４つの活動に取り組むことで、県産ひらめのブランド化、需要拡大、輸送コスト削減による漁業所得の増加を目指したいと思っています。そして地域と一丸となって水産業を活性化させたいと考えています。

知事

庁内ベンチャーチームの皆さん、ご苦労様でした。青森県では、県庁、県立学校の職員がいいアイデアを出してくれると、予算と権限を与えて、何人かのグループでそのアイデアを具体の施策として実行してもらうことを進めていて、昨年、八戸水産高校から大変素晴らしいアイデアが出ました。先輩から引き継いで、こうして進めてくれていることを嬉しく思います。震災があったので、いろいろと段取りが大変だと思いますが、特に輸送の部分について、いい仕事をしてほしいと思います。

そこで、私から情報提供したいと思います。八戸水産高校の皆さんが、氷温でひらめを眠らせて流通させようということを提案してくれていますが、実は、西海岸では、針で魚を眠らせて、輸送のコストを下げようという話が出てきています。八戸水産高校と西海岸の県の事務所と、東西でどちらがひらめをよりおいしく、安く運べるか、期待しています。

そして、この事業にチャレンジしてくれた、八戸水産高校の生徒諸君に感謝したいと思います。

◆生徒と知事との意見交換◆

発言者１（海洋生産科３年　男子）

私は卒業後、自宅のある大間で漁業を継ぐつもりです。夏休み等の長期休業の時は、自宅で両親の仕事を手伝っています。以前父の手伝いをしていた時に、近所のお年寄りの漁師さんから聞いたのですが、「昔は獲れる魚は量が少なかったのに、値段が高かったから、漁師は潤っていた。でも現在はハイテクになって魚は一杯獲れるのに、値段が安くて儲からない。」と嘆いているのを聞きました。

大間にはマグロというブランドがありますが、私はマグロだけではなく、他の魚もブランド化して値段が高くなればいいと思っています。大間や風間浦では生きたままの新鮮なアンコウが獲れます。そこで、新鮮なアンコウを、とも和えやアンコウ鍋、唐揚げの他にも刺身でも食べられる「津軽海峡アンコウ」として、本県のブランドにして売り出すことはできないでしょうか。

知事

アンコウは、青森県でものすごく獲れています。正確には「キアンコウ」と言いますが、下北では３２５トン、八戸でも３１６トンの漁獲量（※）があります。（※県全体では７６４トン、平成２２年青森県統計による。）アンコウと言えば、茨城方面が有名ですが、青森県では向こうの１０倍獲れていて、高く売れていますし、我々としても、もっとアンコウで儲けなければいけないと思っています。ただ、アンコウ自体がなかなか県内で食べる習慣がないというか、料理として提供するお店が少ないみたいです。そこで、今、下北半島

の風間浦にある下風呂温泉では、このキアンコウを名物料理にしようと取り組んでいます。今まで下北では、マグロ、ブリ、イカで勝負していましたが、下風呂温泉に泊まれば、刺身でアンコウが食べられます。アンコウの刺身が食べられるのは、日本では下風呂温泉だけです。「雪中切り」と言って、雪の上でアンコウを解体して、アンコウの肝も刺身みたいにスライスして提供しています。青森で獲れるキアンコウには、ものすごいチャンスがあると思っています。青森と言えばイカやマグロのイメージがありましたが、現在、キアンコウやメバル、モズクといった新しい特産品も、県として一生懸命売り出しています。

青森のキアンコウは、「旅の手帖」などの雑誌でも紹介されていて、食べに来るお客さんも多くなっていましたが、震災があったので、もう一度戦略を立てて、下風呂温泉に来たら、肝も含めて刺身で雪中切りのキアンコウを食べられるという宣伝をしています。また、東京のアンコウ料理が有名なお店にどんどんキアンコウを提供して、実はアンコウの本場は青森県の下北なんだというキャンペーンをしています。このキアンコウをこれからの観光資源にし、皆がこれで稼げるようにしていきたいと思っています。そして、地元でもいろいろなアンコウ料理が食べられるようになればいいと思っています。

将来実家の漁業を継ぐということですが、マグロの一本釣り以外にはどのようなことをしたいですか。

発言者１

今は、まず大間一の漁師になるのが夢です。

知事

マグロの一本釣りは、それぞれ秘密の仕掛けがあるので、自分で工夫してもっとマグロが釣れる仕掛けを作ってください。将来、あなたの釣ったマグロを、全国や海外に売りに行きたいと思います。

発言者２（水産工学科３年　男子）

東日本大震災で起きた福島第一原子力発電所の事故を見ると、福島県の人達は大変だなと思いました。今回のような大きな地震が本県を襲った際、六ヶ所にある再処理工場から放射線が漏れ出したりしないか心配です。そこで、いくつか質問があります。１つ目は、大地震でも放射能が漏れ出さないために講じている対策を教えてください。２つ目は、もし漏れ出したら、避難区域はどこまでになるのでしょうか。八戸の人は避難しなければな

らないのでしょうか。３つ目は、避難した人達を受け入れる計画はあるのでしょうか。

エネルギーに関して、提案があります。青森県は東と西で気候が全く違います。それぞれの地域の実情に応じて、自然エネルギーの開発を進めてはどうでしょうか。八戸は日照時間が長いので、太陽光パネルをどんどん設置すべきだと思います。津軽地方の雪の多いところは、その雪を夏までとっておいてクーラーの代わりにすれば、エネルギーの節減につながると思います。

これらのことについて、知事の考えを教えてください。

知事

エネルギーをどう作るかというのは、日本にとって非常に大きな課題です。これまで、石油や石炭を使ってCO_2を排出して、どんどん電気を作って、車を走らせてきました。皆さんも海洋実習に行くので、海のことには詳しいと思いますが、ツバルのように南太平洋の島々が海に沈みつつあります。あるいは潮水が地下水に入りこんできて、作物等が作れなくなって、人が住めなくなっています。そのような太平洋の島々を含めた沿岸地帯の方々の暮らしが非常に厳しくなっているのは、地球温暖化のせいではないかということになり、それではどのようなエネルギーで頑張るべきかということで、日本そのものは元々石油もないですし、エネルギー自給率が４％という非常に厳しい現実の中で、石炭や石油の火力が主力ではありますが、原子力や太陽光、風力といった再生可能エネルギーをベストミックスしていこう、その中で原子力の比率を一定に保っていこうということを、日本として進めてきた経緯があります。

その中で今回の福島第一原子力発電所のような大きな事故が起きてしまったということは、本当は絶対に防がなくてはいけないという思いが皆にあるわけです。原子力だけではなく、大きな工場もそうですが、大きな規模のシステムというのは、常に危険が付きまといます。だからこそ安全が最優先であり、規模が大きくなり仕組みが複雑になるにつれて、安全対策やメンテナンスなどについて、最も安全に物事が進むかということに常に取り組んでいく必要があります。

国は国で安全対策に取り組んでいますが、青森県は、専門家を集めて設置した検証委員会で、きちんと安全対策が全体のシステムに対してどうなのかということを、徹底してチェックすることを進めています。原子力の仕組みについては、国が法律や権限を全部持っていて、国と事業者が一体となって安全対策を進めるべきものですが、青森県としても、このようにどんどんチェックを入れて点検をしています。

日本のエネルギー状況を考えた場合、今、石油もＬＮＧ（※）も値段が上がってしまい、これから暖房だけではなく、ものづくり産業のためのエネルギーをどのように供給するか、厳しい状況になっています。これは、なかなか難しい問題で、政治的な判断が必要になると思いますが、現実的には当分の間、再生可能エネルギーや火力、原子力等をミックスしてエネルギーを保っていく必要があると思っています。（※ＬＮＧ：Liquefied　Natural

Ｇas、液化天然ガス。気体である天然ガスを約マイナス１６２度まで冷却すると、液化天然ガスになる。）

実は、青森県では最先端のエネルギー、要するに自然エネルギーの実証研究における日本初、世界初の取組を進めています。６年前にここ八戸で、太陽光と風力と下水バイオマスを使って、東北電力さんとは別系統の電気の供給の仕組みについて、世界で最初に実証研究をしました。今後、その時に取れたデータなどを役立てていきたいと思っています。

また、八戸の火力発電所の敷地に、メガソーラーと呼ばれる大規模な太陽光発電所ができます。このほか、北日本と北海道へのＬＮＧの供給をまかなえるくらいの大きなＬＮＧ基地が八戸にできます。ガスとして燃やす以外にも、将来的には天然ガスで質のいい燃料電池ができないかと考えています。そして、このＬＮＧは天然ガスをマイナス１７０度近くまで冷やしたものなので、水産関連で新しい冷凍技術に使えないかということも考えています。

太陽光発電は、各家庭の中だけで使うにはすごく使い勝手がいいですが、余った電気を大量に送電線に入れた場合、周波数と電圧が安定しなくなるため、現状では大量に送電系統に入れるのは難しいです。そのため、今後、太陽光発電が各家庭に普及してくることを考えて、今、六ヶ所に日本中から２０社程度の企業が集まり、太陽光発電で作った電気を送電線に入れるための研究が始まっています。

このように、自然エネルギーの導入、実用化では、まだまだ厳しい部分がありますが、風力発電については、今、青森県が日本で一番になっています。また、名古屋の企業と青森県とで、世界で初めて NAS 蓄電池（※）併設の風力発電の仕組みをつくりました。最初は体育館のような大きな蓄電池でしたが、研究開発をした結果、小型化することができました。東京の「新丸ビル」のエネルギーは青森県の蓄電池風力から送り込んだ電気でまかなっています。そして、六ヶ所の蓄電池風力などを使って、コンピュータのクラウドシステムを集めたデータセンターをやろうということも進めています。（※NAS 蓄電池：ナトリウムイオン（Na）と硫黄（S）の化学反応で充放電を繰り返す蓄電池。風力発電や太陽光発電に併設することで、電力負荷を平準化し、電力変動を抑制することが可能となる。）

青森県は再生可能エネルギー、自然エネルギーの分野ではトップを走っていると言えます。しかしながら、現実には実用化までものすごいコストがかかるうえに、周波数と電圧を安定させて電気を安く作る仕組みづくりの部分で苦労しています。小さい集落を、太陽光、風力、バイオマス、地熱などの自然エネルギーでまかなえるようにする。要するに、送電線を引かずに電気を供給できるようにしていく、そのパッケージシステムを作るのが、私達の強い思いです。

エネルギーは、これからも重要ですし、将来的に技術はよくなっていきます。青森県は、この自然エネルギーの実用分野の研究で先頭を走っています。実証から実用化までに時間がかかるかもしれませんが、君達が大人になり、子供ができる頃には、かなり技術が進むと思うので、期待してください。

将来どのような職業に就きたいですか。

発言者２

国内船の機関士になることです。

知事

国内船もいいですが、世界中の港を回る大きな船にも乗ってみてください。その場合は、英語を覚えておく必要があります。期待しています。

発言者３（水産食品科２年　女子）

私は、本校を卒業したら事務系の仕事に就きたいと思っています。先生方からは、今年は東日本大震災の影響もあって就職戦線は大変厳しいと言われました。特に女子の求人は少なく、一つの会社に応募者が殺到しているとのことでした。そのような厳しい状況の中、３年生の先輩方は頑張っていらっしゃると聞いています。あと１年すると私達の番です。私は、来年の就職試験に向けて、普段の生活の中で元気な挨拶や敬語を積極的に使うことなどを心がけていこうと思っています。また資格取得にも頑張ろうと思っています。

少しでも世の中の景気が良くなって、企業から多くの求人を出してもらえるようになってほしいと思います。高卒予定者のための求人が増えるように、青森県として取り組んでいることを教えてください。

知事

青森県では高校生の就職のために、企業を回って歩いて、１人でも多くの求人を出して採用するようにお願いする「求人開拓ローラー作戦」という取組を進めています。

就職活動の際には、就職するに当たっての自分の心構えをしっかりと持っていることが大切です。また、就職試験では、面接の時に道案内をしてもらったりする質問が出ることもありますので、その時は元気よく答えられるようにしてください。

三八地域県民局長

八戸でも、県民局、労働基準局、学校の先生から企業の方々に対して、求人を増やしてください、そして早めに採用を内定してくださいというお願いをしていますが、企業を回った際、企業の方々からは、若い人達は就職しても気が合わないと辞める方が非常に多いという話がありました。

また、企業でも経営が厳しいと、採用するのは難しいという状況もありますので、知事を先頭に、国から雇用を確保するためのお金を持ってきて、基金という形で積んでおいて、企業で新しい研究をしたり、新しい商品を作る時に、その基金を使って応援し、新しい従業員を雇いやすいようにする取組をしています。

知事

毎年厳しいと言われていますが、高校生の求人倍率は昨年１．２１倍で、高校生が１００人就職したいと思った時に、企業から１２１人の募集がありました。今年は震災の影響で全国的にも本当に厳しくなると思いますが、我々も県内の様々な会社を回って、「６０歳を過ぎた団塊の世代の人達が、定年でどんどん辞めているので、人材を補うためにも必要ですよ。」とお願いしています。

その意味では、県内の雇用状況は、震災後の今でも何とか乗り切ってきましたが、東京や埼玉、神奈川といった首都圏、いわばこれまで日本の雇用を支えてきた地域で、エネルギーもなく、円高の日本ではやっていけないということで、大手の企業がどんどん中国やベトナム、インドネシアなどの海外に流出してしまい、産業の空洞化という形で雇用情勢が大変厳しくなっています。特に今年は、震災後の景気対策が日本全体で現実的にはなかなかうまくいっていないので、本当に厳しいと思います。県としては、皆さんのためにも頑張って、雇用対策をしたいと思います。

知事としては、そのような雇用対策のほかにも、企業誘致をしたり、農商工が連携した６次産業化（※）という新しい産業の組み合わせを作る取組をして、雇用、働く場を作ることも進めています。（※６次産業化：農林水産物の生産だけではなく、加工などの第２次産業、流通・販売などの第３次産業を組み合わせ、高い付加価値や新たな関連産業の創出を図ること。）

青森県の大きな課題の一つは、産業・雇用対策、働く場をいかに作るかということになりますが、もう一つ、命を守るための健康づくりにも力を入れています。というのは、先ほど缶詰を試食して、以外に薄味だったので安心したのですが、青森の加工品には味付けが濃く、塩分濃度が高いものがあります。青森には食材としていいものはたくさんありますが、体に負担のかからない、健康的な食品をどのように食べてもらうかということにも苦労しています。

ともかく、働く場を一生懸命作るのが私の仕事だと思っています。ただ、企業誘致をしても、ものづくりの企業が多く、事務系の雇用は数人しかいない状況でもあるので、事務系で採用されるためには、パソコンの資格を取ったり、面接でしっかり話せることが必要になってきます。一方、介護・福祉の分野ではまだまだ需要があり、特に女性の職場として求人は多いので、この分野を目指す方は、介護福祉士の資格を取ることが大事だと思います。

事務系の仕事ではどのようなことをしたいですか。

発言者３

電話の応対などをしたいです。

知事

そうであれば、今から目的意識を持って、相手にアピールしていきましょう。あとは笑顔を忘れないでください。

発言者４（情報通信科１年　女子）

青森県には白神山地や十和田湖などの豊かな自然、十和田のバラ焼きや八戸のせんべい汁等、Ｂ－１グランプリでも入賞するおいしい郷土料理、少し口数は少ないけれど、優しい人間味あふれる県民性、そして、ねぶた祭りや三社大祭等、素晴らしいところがたくさんあります。私はこれらをどんどん全国にアピールしていくべきだと思っています。

私の地元の名川では、首都圏から修学旅行生をホームステイで受け入れて青森県の良さを知ってもらっています。ホームステイでは、青森産の食材を使ったおいしい家庭料理を食べてもらったり、温かい県民性に触れてもらえると思います。また全国的には有名ではないけれども、例えば名川まつりのように、その地域で昔から伝わる祭等、青森県特有の伝統や文化を知ってもらうこともできるのではないでしょうか。

そこで、提案ですが、青森県の一般家庭にホームステイをするツアーを、青森県全体で企画することが、最も本県のＰＲになると思うのですが、いかがでしょうか。

知事

すごいしっかりとした提案と意見をいただき、ありがたく思います。名川には「達者村」があるのを知っていると思いますが、名川に行ったら、すごく元気になって、ここで長生きできて、おいしいものを食べられて、ホームステイを含めた長期滞在もできる新しい村を作ろうということを、町長さんと始めました。

今では、関西からの修学旅行生や台湾の子ども達までホームステイに来てくれるようになりましたし、全国のいろいろな方から注目を浴びています。達者村では、自分達のもうひとつの故郷に帰ってきたように、そこに留まってくれる、地元の人達と交流してくれる、そのような仕組みづくりを大事にしています。

青森県全体としては、グリーン・ツーリズムという取組をしていますが、最初千人くらいだったのが、今では６千人くらいまで参加者が増え、多くの人達が青森県に来てくれています。先ほど話をしたように、台湾や海外の人達も来てくれていて、今回の地震があった時に、台湾の中学生達が青森の仲間のために街頭募金をしてくれたり、これまで青森に来てくれた関西方面の人達が寄付してくれたり、義援金を送ってくれました。このように、ホームステイやグリーン・ツーリズムでは心の交流が生まれるので、大事な取組だと思っています。

提案してくれたホームステイなどの仕組みをどんどん進めていくと、ただ単に観光に来て、少しの期間滞在するだけではなく、青森の応援団になってくれる人がすごく増えてくれると思います。

青森県でグリーン・ツーリズムを最初にスタートしたのは、田子や名川、十和田などの県南地域ですが、現在では黒石や平川などの津軽地域にも広がっています。また、グリーン・ツーリズム以外にも、ブルー・ツーリズムという、漁師さんの家に泊まり、漁師さんが獲ってきた魚で朝ご飯や晩ご飯を食べるツアーが深浦や鰺ヶ沢で人気があります。先ほどアンコウの話をしましたが、下北でもお風呂と海の幸を楽しむ「ゆかい村」という試みが始まっています。

このように、青森県内のいろいろな地域で、県内外の方や国外の方と交流することで、地元も元気をもらう、心の交流が生まれる仕組みを広げています。

将来の夢は何でしょうか。

発言者４

パン屋さんになることです。

知事

パン屋さんであれば、これからは米粉パンが人気が出ると思います。実は日本ハムが日本のお米を調べたところ、青森県の「まっしぐら」というお米がイースト菌酵母とすごく相性がよいことがわかり、日本ハムの作る米粉パンや米粉を使ったピザは、実は五所川原のまっしぐらを使っています。もちろん三戸で作っている麦を使ってもいいですが、これからは米粉パンもすごく可能性はあると思います。

そして、パンは機械ではなく、自分でこねて焼くと、おいしいパンになります。期待しています。

発言者５（情報通信科３年　男子　生徒会長）

私は来年から社会人になりますが、社会人になるに当たっての心構えについて教えてください。

知事

一言で言えば、常に生真面目であること、そして、まっすぐ前を見て進むことが大切だと思います。

就職先はどこですか。

発言者５

海上自衛隊です。

知事

最近の自衛隊の試験は厳しくなりましたが、よく受かってくれました。海の男としての仕事、大いに期待しています。

◆知事所感◆

知事

今日はすごく楽しかったです。発表の組み立て方そのものが楽しかったし、皆さんが作った缶詰もおいしく試食させていただきました。意見交換をした５名の生徒さんや庁内ベンチャー事業にチャレンジしてくれた皆さんも含めて、八戸水産高校の生徒諸君には「前向きさ」を感じました。この厳しい時代でも、前向きに、笑顔で頑張ろうというガッツを持ってくれていることを、すごく嬉しく思いました。

先ほど生真面目という話をさせていただきましたが、真面目に物事に取り組む、真面目に前に向かって進んで行く、そして自分の人生を築きあげていく。そのような気概も感じました。１００年を超える八戸水産高校の歴史の中で、皆さんの溢れるエネルギーが、青森県のみならず、日本、さらにはこの地球の水産を元気にしてくれると思いました。

皆さんが八戸水産高校に来ているということは、それぞれに将来の夢への決意があるのだと思います。３年生はもうすぐ卒業するので夢に向かって巣立っていきます。２年生はいろいろな意味で勝負どころです。１年生は自分の人生を考えて、どう歩んでいくか考えてください。高校生の時代は、生涯を通じた友達ができますし、自分の歩んでいく道というものに一定の方向性が見えてくる頃です。それぞれの素晴らしい人生に向かって、しっかりと歩んでいただければと思います。

今日は本当にありがとうございました。